言語行動の国際比較*

林 大

COMPARATIVE STUDY OF LANGUAGE BEHAVIOR

Oki HAYASHI

雑誌『言語生活』の昭和 57 年 8 月号に、朝日新聞外報部長の白井健策氏が、「島国びとの功と罪と一外にあって外から見れば」の一文を寄せておられる。そこには、在外の経験から、イタリア人のけんか、日本人のノーベル賞受賞者の記者会見への対応、日本人の対話の合づち等々、いろいろのおもしろい話題が出されている。これらがまさに言語行動の国際比較であるが、国語研究所では、このような問題を研究の一つの対象と考えて、数年間ドイツとの間での対照的研究を試みた。私はその研究に加わっていた一人として、その結果の一部を紹介しようと思うが、具体的な話に入る前に、このような研究について私自身がどのような理解をしているかを、きわめて概括的に述べておきたい。

まず「言語行動」ということばには、周辺に「言語」

「言語活動」「言語生活」等々の用語がある。「言語」と呼ばれるものには、音声、語彙、文法といった形式の面と、それを枠組みとして実際に操作する活動の面とがある。その活動の面、すなわち「言語活動」が、我々の生活、人間生活の全体の中ではたらいっているところ、言語行動が関連する限りの生活を「言語生活」というものと私は考える。またその言語全体は、言語活動のいろいろなまとまりから構成されている。そのまとまりというものは、あいさつ、けんか、相談、読書、手紙書き等々といったもので、こういう、言語生活を構成する単位を「言語行動」とよぶものと考えている。

元来、言語には、「記号」という上位概念があるはずである。一般に言語のはたらきとして、思考・伝達ということあげるが、人間の思考伝達は、言語形式による記号活動だけでなく、非言語記号による活動でも行われる。例えば身振り、手振りなどの身体活動や、図や絵や立体的な形によって示すというような言語以外の記号活動と、互いに独立に、又は共同したり補助しあったりして、この通俗社会（悟りの世界の以心伝心などは別にして）の人間の思考伝達が成り立っている。この言語記号によって思考伝達が可能であるということは、一つには、個人個人の行動を制御したり、人間関係、社会関係を調整したりするとともに、また知識、情報の獲得、交換、蓄積、そして人間文化の創造、発展をみちびくものである。大げさな話は今は止めるが、この大きなはたらきの中で、言語行動は他の記号活動との関連の上で問題とされなければならない。

言語行動は今述べたように、言語生活あるいは広く生活の中で、あるまとまりとして捉えられる行動の形式とその実行であるが、それは全体にどのようなものがあるか、まずそれらを現実我々はどうのような名前で

* 本稿は、昭和 57 年 8 月 28 日、日本行動計量学会第 10 回大会記念公開講演会で行った講演の草稿に手を入れたものである。

後段に述べたのは、国立国語研究所が西ドイツと日本国内で行った二つの調査研究の結果の一部である：①「日独語の対照言語学的研究」——代表 林 大、昭和 52~54 年度学術振興会助成金によるドイツ語研究所との共同研究 ②「日本人の言語行動様式に関する比較対照的研究」——代表 江川 清、昭和 55~56 年度文部省科学研究費一般研究 B による。その全体的な報告は 58 年度末刊行予定である。なお、上記以外の国際比較研究として「日本人と外国人との言語行動様式の比較対照的研究」（昭和 52~55 年度）を行い、「日・仏語の対照言語学的研究」（代表 川本茂雄、昭和 55~57 年度文部省科学研究費総合研究 A）に参加している。

** 前国立国語研究所長 (ex-Director General of National Language Research Institute)

捉えているだろうか。これを総合的に見渡して、「言語行動名目一覧」とでもいうものを作ってみたいと思う。さしあたって思いつくままをあげてみると、例えば、

掛け声 詠歎
 独り言 ぐち 意志表示
 判断 描写 想像 疑問
 呼びかけ 名乗り
 合図 号令 注意 差図
 依頼 訴える 泣きおとす
 はげます ひやかす ののしる
 ほめる おだてる いびる
 報告 説明 説得 質問
 あいさつ 応接 応答 あいづち
 約束 礼
 唱え言 歌 読経 朗読 ロマネ
 アナウンス 読み聞かせ 読み合わせ
 対話 座談 雑談 相談 会議
 カウンセリング 言語治療
 演説 講話 講演 口演
 講談 落語 漫才 演劇

というようなものであるが、これを組織立てようとすると、いろいろな観点から分類が必要になる。まず、ここにあげたものの中には、まとまりとして微小な単位、例えば、掛け声、合図、あいづちのようなものから、拡大した単位、例えば、対話、会議、演劇のようなものに至るまで、その間にいろいろな段階があり、その現れ方として、単純なものから、同時に複合したもの、相互に交替するもの、順次に連続するものなどの複雑なものがある。

もし内容の面から見ると、これらの名目は必ずしも互に排他的でないから、整然たる体系表に組織することは困難であるが、その性質上の分類には、次のような観点を考えることができる。その一つは、内発か外発か。内発というのは心内活動であるが、とりとめの心動きのほかに、整った言語形式で判断したり推論したりその他思考を展開するのが重要な活動である。それには、思弁、思索、思案などという積極的な活動と、あらゆる外部に対する理解、聴問や読書のような受容活動とがある。心内ではあるが、時には、唇読みとよばれるような黙語があり、またそれが他に聞こえる音読や独り言の外発活動につづく。外発には聴覚に訴える言語発表、聴覚言語形式を第一次記号系としての第二次記号系である視覚の文字や触覚の点字、また第一次記号系としての手話などがある。これ

らの間では、相互の対応関係が問題である。上に例としてあげた名目は、主として聴覚的発表行動に属するものである。

次に、発表に目をあてると、一方的な伝達行動(例えばアナウンス)、相互的な交換行動(例えば対話)、集団的な交換行動(例えば会議)の別が立てられる。その一方的なものうちにも、相手が特定の個である場合、集団である場合、また不特定のマスである場合があることはいうまでもない。即時の feedback が可能であるかどうかによって、例えば教室での講話などと、放送や文字表現などを区別することも必要になるであろう。しかし、この区別は名目の上では明らかにしたい。

また、日常的に、定期、定刻もしくは不定時に繰返される行動か、又は臨時に機会を得て行われる行動かの別、伝達の効果を期待する上で即時的か、準即時か(手紙など)、指定時か(遺言書など)、随時的か(一般の文章や広告など)等の別がある。

行動の動機から見て、遊びと実用とが区別されよう。遊びには、幼児の喃語(前言語というべきか)、なぞ、しりとりなどの遊戯から、おはなし、落語、漫才の類、さらには高尚な洗練されたものに至っては文芸や演劇の創作や受容が含まれる。(人間の遊びの極致は哲学であろうか。)実用には、職業には関しない一般日用のものと、職業の実務に関するものとがあり、その実務にも、職業上必要な言語活動(受付、応待、説明、文書往復など)とそれが職業である言語行動(アナウンサーの、ガイドの、ライターの、演芸のなど)とがある。

内容についていえば、特別の観点として、なお例えば、教育的な言語行動とか、異言語接触の際の言語行動とか、言語や言語行動のことを内容とする言語行動とかを、特にとりたてて問題にすることができよう。異言語接触では、通訳や翻対訳のほかに、対外国人態度、身振片言行動、会話拒否、自国語評価が注意される。言語を内容とするというのは、大きくは言語論争や言語学記述のようなものから、微小には、「こう言うては何ですが」など用語弁解の挿入のようなものまでとりあげられる。

上にあげたような名目を、互いの間の関係を明らかにして体系的に組織することと、それらが生活の中でどのように配置され、どのような重みを持っているかということが、言語行動の研究の第一段階であると思

う。すなわち、個人、集団、民族、国民の言語生活の構造を明らかにするものである。

言語行動研究の第二問題としては、個々の言語行動単位がどのように実現するか、その行動の要素、それを支えた規制する条件、一般的な傾向、標準などを明らかにすることである。今、言語行動単位が、一般にどのような要素をもって成立するものであるかを考えてみると、次のようなことになろうかと思う。

(1) 動機、目的、内容 ある言語行動が触発されてしかるべき具体的目的内容をもった条件と、その実現を推進又は抑圧する一般的条件と、それに実現の意志の決定が加わる。

(2) 行動の形式を選ぶ条件 すなわち、相手と時と場合である。相手としては、相手自身の性、年齢、身分、境遇と、話し手の自分（話者、行動主体自身）との関係における性の同異、年齢の上下、家族関係、身分関係とが計算に入る。また、直接当面する相手（当の相手）のほかに、傍において意識される聞き手（わきの相手）がある場合があり、真の相手を目的として当面の相手を媒介とする伝言の場合、わきの相手が実は真の相手である場合が考慮されよう。

時と場合とは、はっきり分けたいが、時刻、時節、時機など、家庭内か路上か仕事場等の舞台、密室か開放か群衆中か、舞台が自分側か相手側か、相手側との人数その他の緊張関係、内輪か外向きか、私か公か、などである。会話書などには、旅行者がよく出合う場面がとりあげられている。

(3) 選ばれ得る形式 以下のすべてが常に問題となるとは限らないが、組合せが選ばれる。

- a) メディア 音声、文字、身振等のどれか、また、面接、電話、郵便、複写、印刷等のどれかが選ばれる。
- b) 言語形式 言語、文体の選択（日本語か英語か、方言か共通語か、敬体か常体か、口語文か文語文かなど）、音声の選択（甘え声かとがり声か、強弱大小、抑揚の幅、緩急など）、語句、語法表現、待遇表現の選択、文字、表記の選択など。
- c) 身体表現形式 表情、身振、手まね、姿勢、服装などの選択
- d) 挙動、態度 立って、すわって、歩きながら等。正座、あぐら、居丈高など。
- e) 相手への面し方 正対、斜め対、横並びなど。また相手との距離のとり方。
- f) その他 時刻、時間枠、場所など。

(4) 場面 効果に影響する条件として、(2)の時と場合のほか、話し手自身の身心の状態及びその他の自然的、社会的環境条件も、言語行動の要素である。

(5) 実行の展開経過 実際に行動がどのように展開するかである。大きくは、準備、開始、進行、終結の4段階と、平行又は継起する行動との連続の仕方とが考えられる。

(6) 効果・影響及び評価 一つの言語行動が実行されたとき、実際にどのような効果・影響をもたらされたかの事実と、それに対する話し手自身の満足度及び実際の成功度、経験への組み入れ等である。

以上、第一の問題として言語生活の体系、第二の問題として言語行動の構造を考えたいが、第三として、言語行動及びその複合としての言語生活に対する意識をとりあげるべきであろうと思う。それについては、すでに第一第二で触れているが、個別の実行にあたっての feedback、選択への熟慮、反省、評価などの仕方、それらのもとになっている言語形式や言語行動の標準や規範についての寛厳ささまざまな考え方、ひいては、言語の共同使用者として自国語改善への関心、自国語生活の評価などのあり方を考える。これらは、言語行動そのものとは言えないかも知れないが、それを基本的に支えるものである。

さて、これらの言語生活、言語行動や言語意識について、個人なり集団なり民族、国民なりの特色をさぐることになるのであるが、それについては、個人間の、集団間の、量的質的な比較対照が明らかに捉えるであろう。ある言語行動が一方にあって他方ない場合もあり、共通の言語行動、対応する名目があってもその構造が異なる場合もあり、それぞれに違った評価が行われる場合もある。それらの対比が、それぞれの特色をあらわすのである。我々としては、まず国際比較にとりついたわけであるが、その実用的な目的は、国際理解を深めること、国民間のコミュニケーションに生ずるかも知れない誤解を防ぐこと、そのためにそれぞれの対外自国語教育又は外国語学習に寄与することである。

我々が、ドイツ語を用いるドイツ国民（西独）を比較の相手に選んだのは、ドイツ語だけが研究上の緊急性をもっていたとは必ずしも言えないが、たまたま日独文化協定の一環として日独共同研究の機会があり、幸いに学術振興会の援助を得ることができたからである。マンハイムのドイツ語研究所とのこの共同研究で

は、主として日本側がこの言語行動比較を分担したもので、同研究所の懇切な協力に感謝している。

この日独の言語行動比較の研究については、いずれあるまとまった形での報告が公表されるはずであるが以下にその一部を紹介しようと思う。これは、日本で約500人、ドイツで約300人の被調査者に対する、留め置きアンケート調査で、被調査者は両国とも主として市役所その他の勤め人と学生で、男女が含まれている。アンケートは具体的に尋ねてはいるが、意識を調査したということになる。

以下、4種類の資料グラフについて説明することにする。第一は言語生活、言語意識に関するもの、第二はきまったあいさつ行動に関するもの、第三は出会いの際の身振、第四は路上の立ち話の際の相互の距離に関するものである。

資料1. 言語生活

言語生活の中で読み書き行動の代表的なものとし

図1-1. 新聞を読む時間 (1日)

て、新聞を読む時間と個人的な手紙を書く回数を調べたのが図1-1, 2である。

新聞については、日独ともに全員に近い人が毎日読んでいるが、30分以上かけている人がドイツでは20%に達しないのに、日本ではドイツの倍を越えて40%近くある。平均は推し当てで日独27分対21分ほどになるうか。NHKの国民生活時間調査では新聞を読む人の新聞に費す平均時間が平日でも43分と出ている。

手紙については、日本では70%余が調査前1か月間に書いていないのに対して、ドイツでは80%ほどが書いている。しかも4~5通又は6通以上書いたと答えた人が、日本では7%、ドイツでは47%とたいへんな開きがある。(なお、国語研究所では昭和39年に松江市民について、同様の生活調査を行ったが、その結果は、新聞ではドイツに似てやや低く、手紙では1~3通が50%近くを占めている。今の日本との差は、対調査者の性質の差、年代差、地方性によるところがあると思われる。)

図1-2. 個人的な手紙を書く (1ヵ月)

図1-3. 近所の人とおしゃべりをするのは

図1-4. 待合室などで知らない人に話しかけるか?

図1-3, 4は、言語交際に関する態度を問うたもので、近所の人とおしゃべりをするのは好きかきらいかとの問に対しては、好きなほうと答えたのがドイツでは40%近くあるのに、日本では10%に達しない(松江は20%余)。きらいなほうは、ドイツにも20%余あるが、日本はそれより10%多い。あとはどちらとも言えないという答であるが、日本60%近く(松江は50%余)、ドイツ40%近くではっきりした答がドイツのほうに多いことになる。

待合室などで知らない人に話しかけるかとの問に対しては、ドイツでは話しかけるほうが話しかけないほうよりいくらか多いが、日本では話しかけないほうが圧倒的に多い。話しかけるのは15%弱である。この日本の場合は、勤め人、学生という対調査者の性質によって強調されているものかも知れないが、今はわからない。(松江調査では、話さない55%, よく話す12%, どちらとも31%であった。)

図2-1. あいさつをする人の割合

資料2. 日常生活の中のあいさつ

あいさつは、日常生活の中で、社会関係を調和させるための基本的な行動である。ここでは開会式の会長挨拶とか転任挨拶とかの類を別にして、日常繰返して現れる場面13をとりあげ、身振り等と合わせて調査した。今は、言語形式に関して二三のことを述べることにする。

その13場面は図中に示すとおりであるが、夕食の前後、起床就寝の時、外出帰宅の時、路上の出会い等、日常的なもののほかに、誕生日の祝い、不幸への悔みが加えられている。

図2-1全体で見ると、夕食時の2場面を除いてドイツはほとんど90%以上の人があいさつをする。食前のあいさつは、日独ともに65%余であるが、食後は日本が70%近くになるのに、ドイツが30%にはるかに達していないのが目立つ。図2-2に一部示すように、男女別に見ると、すべての場面で日独ともに女のほうが高い比率を示している。日本の場合、もし男女を同数と

図2-2. あいさつをする人の割合 (男女別)

	日 本	ドイツ
(1) 夕食のはじめ	4種	54
(2) 夕食のおわり	11	46
(3) 朝起きた時	8	55
(4) 夜寝る時	12	81
(5) 外出する時	35	99
(6) 外出する 家族を見送る	28	99
(7) 帰宅した時	12	102
(8) 帰宅した 家族を迎える	20	106
(9) 朝近所の人に	6	67
(10) 昼近所の人に	11	74
(11) 夕方近所の人に	14	61
(12) 誕生日の知人に	39	129
(13) 不幸のあった 知人に	120	127

図2-3. 回答に現れた言語形式の種類

図2-4. 回答数上位2種の占める割合 (日本)

してこの比率で換算すると、男女合計では70%を越えるであろう。すると、食前後いずれも日本のほうが高いことになるが、それはともかく、食作法の違いが現われているものと思う。

他の11場面では、路上での出会い、すなわち近所とのつきあいについては、図2-1, 2を通じて、日独、男女、ほとんど違いがなく100%に近いことが知られる。他は日本のほうがある程度低く出ているが、そのうち、今日が誕生日である同性の知人に道で会ったという場面では、ドイツがほとんど100% (女100%) であるのに対して、日本は男が38%, 女が78%, 全体はやっと43%, 仮に男女同数に換算しても60%に達しないようである。これは、全体として日独に差があることとともに、日本での男女差が格別に著しいことが特色で、誕生日というものについての考え方が違うことを示している。

次に、図2-3, 4に示すところは、上の13場面のあいさつに用いると答えられた言語形式についてである。図2-3は、言語形式種類の数、あいさつはどれくらい言い方があるかを示すが、一見して明らかなように、不幸の悔みを除いては、どの場面でも日独に大きな差が

あり、日本ではバラエティが少ない。さらに日本の場合、図2-4に示すように、少ないあいさつ言葉のバラエティの中でも、きわめて優勢なきまり文句が限られている。例えば、夕食前のあいさつは、「いただきます、いただきまーす」で98%、夕食後「ごちそうさま、ごちそうさまでした」で92%、帰宅のあいさつ「ただいま、ただいまかえりました」で91%、また、朝のあいさつは、家人に「おはよう、おはようございます」で95%、近所の人に「おはようございます、おはよう」で96%、これらは上位の2形式であるが、その中でも第1形式が圧倒的である。帰宅を迎えるあいさつ「おかえりなさい、おかえり」、就寝時の「おやすみ、おやすみなさい」のように、第1, 2位が比較的せりあっている場合もあるが、いずれにせよ2形式といっても同一基本形式からの変形である。その点から言えば、ドイツでもバラエティは多く答えられたが、同一定型からの変形もある程度数えられていないわけではない。言語形式としては、その変形の生じ方に興味もたれる。

家族に不幸のあった知人に会うことは、日独ともにあいさつ場面として認められてはいるが、その表現の多様性も相似ているものはもっともなように思われ

図 3-1. A 親しくない同性の知人に会った時の身振り

図 3-2. B 親しくない異性の知人に会った時の身振り

図 3-3. C 親しい同性の人に会った時の身振り

図 3-4. D 親しい異性に会った時の身振り

る。ただし、ドイツの場合の多様性は、誕生日の知人への祝福と同様なものである。

資料3. 人と街で出会った時の身振り

これは、街での出会いという場面で、言語活動への準備又は随伴もしくは代りをする身体的行動について問うものである。それにはまず、被調査者に、4人の相手を具体的に思い浮かべさせて、それぞれの人に対して時にとられるはずの身振りを尋ねた。その4人とは、次のようなA, B, C, Dである。

	同性	異性
顔見知りであるが		
あまり親しくない人	A	B
最も親しい人	C	D

Cは、例えば友人、兄弟姉妹、親子など、Dは例えば兄弟姉妹や配偶者などということにした。

さて、図3-1, 2, 3, 4がそれぞれA, B, C, Dに出会った場合である。図3-3, 4に示すように、(1)~(11)の11個の選択肢(択一でない)があるが、A, Bに対しては(6)~(11)の6個は答えがない又は問題にならない数なので、図3-1, 2では選択肢(1)~(5)の場合だけが示してある。

図3-1 (A) と図3-2 (B) とでは、ほとんどグラフ

の形が変わらない。そのうちの日独の差異は、ドイツがほほえみ、日本が会釈で高率を示すことである。また、少数ではあるが、おじぎと握手とを日独が分けられている。

図3-3 (C) と図3-4 (D) とを見ると、日本では、ほほえみと手信号とを合わせたものがいずれも80%ほどになるが、対同性で手信号がふえ、対異性ではほほえみがふえる。ドイツでは、対同性で握手、ほほえみ、抱擁、対異性で抱擁、接吻、握手、ほほえみが順に現われる。

A, B, C, Dを通じて見ると、日本では会釈がA, Bに対するもので、手信号がC, Dに対するものである。ドイツでは、ごく大まかに見て、A, BからCを経てDへ、疎から親へ、親の中で同性から異性へと、身体的接近の度が進むと言えよう。

なお、ここに図示しないが、男女差については、日本の場合、対A, B, C, Dともに、ほほえみが女に率が高く、手信号が男に高い。対同性で手信号、対異性ではほほえみが増加する傾向は、男女とも変わらない。また、ドイツでも、ほほえみは対A, B, C, Dともに女に高く、握手は対A, B, Cに男に高い。抱擁は、対同性Cはほとんど女で、対異性Dになると3分の1が男である。対異性Dに接吻するのは男女ほぼ等しい。

図4-1. A親しくない同性

図4-2. B親しくない異性

図4-3. C親しい同性

図4-4. D親しい異性

資料4. 人と街で立話をする時の距離

立話の際、相手との間をどのくらいに保つか、資料3の場合と同じA, B, C, Dの4人に対して、互いに手の届かない程度、互いに手が触れる程度、自分の手が相手の体に触れる程度、相手と抱き合える程度、の4段階のうちから選択するものである。

図4-1, 2, 3, 4が順にA, B, C, Dに対する場合の答である。日独ともにB, A, C, Dの順に接近度が高くなるが、日独を比べると、日本よりもドイツのほうが、B, A, C, Dそれぞれに対してより近くに寄っている。これは資料3の場合に認められた傾向をいっそう明らかにしていると言えよう。また実際に我々が西洋人に対してよく経験することと応じているように思われる。(日本では女の場合、B, A, D, Cの順になる。親疎とも異性に対して、同性に対するよりも距離がとられるわけである。)

以上、グラフによって述べたところは、我々の調査の一部分に止まるが、調査の全体としても、この前半で極力広げてみた問題領域からすれば、面国民の言語生活、言語行動の全体的比較としては基本範囲が限られている。国語研究所では従来、国内における言語生活の実態についての調査の経験を重ねているが、そしていくらか国内の比較にも手をつけているが、国際的な対照的研究は、これから一層発展させていかなければならない。私としては、全体の特色をよく捉えることのできるような問題点を組織する一方、特に日本から比較することとして、やはり敬語行動というものがとりあげられ、また、文字使用の意識が問題とされる必要があろうと思う。また、対象とする言語やその言語行動だけでなく、質問法による場合の質問そのものの言語的性格を明らかにすることが基本的に重要な課題であろうと思う。